

# 文学教育の課題

——「赤がえる」の取り扱いを通じて——

佐 本 房 之

## 目 次

- 一、はじめに
- 二、指導目標と単元構成
- 三、昨年度と本年度の実践の比較
- 四、問題と反省

### 一、はじめに

昨年とことしの二度、島木健作の「赤がえる」を扱った。「人生の探求」という単元の最後の教材なので、かなり苦心した。ことに昨年はあまり感銘を与えることができなかった記憶があるので、昨年の記録はあまり参考にせず計画をたてた。

二回の実践を比較してみると、かなりな違いが見られ、そこにさまざまな問題が介在していると思われるので、ここで反省してみたいと思う。

### 一、指導目標と単元構成

実践報告の対象である島木健作の「赤がえる」は、好学社の「新

編高等学校国語」三の第一単元「人生の探求」の最後に組まれているものを列挙する。

この単元の指導目標としてあげられているもののうち、関係のあるものを列挙すると

- (1) この単元では、人生を深く見つめて自己の生き方を考え、生活を豊かにしようというのである。(単元設定の理由)
- (2) 作品を通じて人生について思索する態度を養う。

空虚な思索や安易な解決に流れず、現実在即して徹底的に人生の問題をきわめる態度を、この単元によって正しく指導したい。(単元の目標)

(3) 結局「詩、箴言、評論、小説に読みなれ、人生探求の手がかりとする」ということになる。(同前)

そしてこの単元におさめられている作品は蒲原有明の「牡蛎の殻」パスカルその他の「箴言集」、寺田貞彦の「科学者と芸術家」、最後が島木健作の「赤がえる」という順である。

### 二、昨年度と本年度の実践の比較

(1) 昨年度の実践記録(学習日誌より)

・六月三日 黙読する。

(宿題) 作者はかえるに対してどんな気持を持っていたか。それはどこにあらわされているか。

・六月五日 宿題のまとめ

(宿題) 作者はなぜ赤がえるを観察して文章に書く気持になったか。二行よくあらわれているところがある。(三八ページ以後)

・六月十日

(一) 私少説(一人称)

(1) 主人公 Ⅱ 私 Ⅱ 作者

(2) 形式的には簡単であるが、理想像の追求ができない。

(3) 随筆によく似ている。

一人称

二人称

三人称

私小説

(彼小説)

↓ 作者は第三者の立場に立つて自由に書きあらわすことができる。

(二) 心境小説

(1) 作者の理想像がえがき出される。

(2) 随筆に似ている。

(3) 作者の心境がどのように変化しているかが問題の中心になる。

(三) 作者の赤がえるに対する気持の変化をたどる。

・六月十二日

主題

・作者の気持の移り変わりを追って。

・作者がこの「赤がえる」で何を言おうとしているのか。  
六月十七日

鑑賞文を作る。

〔参考〕使用したメモ(二枚)

① 主題……一匹の赤がえるの行動から死によっても被ほしえない生命の意志を感じ、自然の厳肅さ、神秘さに敬虔な気持を感じている。

権想……起承転結のたしかさ。

表現

(1) 心境描写の適確さ。

(2) 静かな強い感動がにじみこむように表現されている。

(3) 何年か後に書かれたのに、生き生きとした描写である。

(4) 会話表現は一か所しか出てこないが生き生きとした具体性を持っている。

作者

・自然の中に人間を見ろる人。

・意志、努力を人間の中心に置こうとする人。

② 鑑賞文を作る。

(1) 書いてみたいことを列挙する。

(2) まとめる立場をきめる。

・感想を中心とする。(うけた感動)

・批判を中心とする。

(主人公の性格、行動、作者の人生観、人間観、書き方)

(3) 主題をきめる。

・いちばん中心(クライマックス)に何をすえるか。

(4) 構想をきめる。

・「なぜならば」か「ゆえに」か。

・どれとどれをどの順序に並べるか。

(5) 表現（注意点）

(1) 文を一つ一つ完成させる。

（主、述、かかりうけ）

(2) 文末部表現に注意する。

（統一と変化）

(3) 文と文、段落と段落に気をつける。

(2) 本年度の夷戯記録

・六月六日

全編通読

(1) テーマはどこにあらわれているか。

(2) 作者はどういう人生を肯定しているか。

(3) このテーマに対してどう思うか。

(4) 作者の気持が最もよくあらわれているところはどこか。

（注：(1)は宿題。(2)は(1)）

・六月九日

(1) 作者の感動が強く表現されているところ。（どのくらい強く感じているか。）

(2) 三段にわけると

(a) バカなやつだと思ふ段階

(b) 精魂を尽くすかえる。

(c) 精魂を尽くし果したかえる。

・六月十日

(1) この小説はどういう系統に属するか。また、どういう点に注意して読めばいいか。

(2) プロット構成

(a) プロットの話（怪談）

(b) プロットを切る。

心理の変化を中心にして。

死んだ時何も考えていない。これも心理の一つ。

(c) あらすじを話し合う。

(d) テーマの再検討。

・六月十三日

島木健作と私

(1) どこがちがうか。

私たちは退屈したら立ち去る。

(2) なぜ健作は立ち去らないでいられたか。

(a) 偶然的条件

宿屋・身体↓心理

しかしこの人はこういう老え方をするらしい人ではある。

(b) 健作の過去の生き方

社会主義者としての全身的な生き方↓精魂尽くす真剣な

生き方への同情、賞賛。

▲真剣に充実した日々を持つことが人間の目をきたえる。

(1) 私たちはどうすれば健作と同じ目を持ちうるか。

(a) 物の見方のタイプを身につける。

（参考としてローズワースの「そらだ、それは山びこだ

った」をあげる。

- (b) 日々を充実させる。(真剣でさえあれば失敗もまた充実である。)

(Eコースでは予想以上の成功であった。理由は健作の過去の時に引用したクロボトキンの「青年に訴う」の内容容による。)

・六月十五日

- (4) 「赤がえる」のまとめ

テーマに対してどう思うか。

いかに生きるかは、いかに死ぬかでもある。

- (4) 「人生の探求」のまとめ

【参考】使用したメモ(二枚)

① 1、全編通読

- (1) 作者は赤がえるから何を感じとっているか。

(2) 作者の赤がえるに対する感動が、最も感動的に表現されているのはどこか。

(3) この作品は、今まで読んだ小説のうち、どの系統に属するか。

2、私小説(心境)として、心理の変化によってプロットを切っていく。

- (1) 好意をもった「ばかなやつだ」——川の渡りそこない。

(2) 精魂尽くしても目的に到達しえぬ無力さへのあきらめ。

——(同前)

(3) 同情ときびしさ。——(類前↓死)

(4) かえるの死を通して、精魂を傾け尽くすものの静かさをた

たえる気持。

- (5) 自分の感動を反省、昇華している。

△かえるの行動と、それに対応する心境の表を作らせてもいい。

### 3 問題

- (1) 作者の人生観に対してどう思うか。

(2) なぜ作者は立ち去れなかったのか。

過去の生活の充実はその人の目を鋭くする。失敗も充実の一つ。

(3) かえるの死によって、なぜ作者はこらまで感涙したのであろうか。

同前

② 1 「赤がえる」のまとめ

2、「人生の探求」のまとめ

- (1) 牡蠣の殻の有無

(3) 人間……複雑と矛盾に満ちた存在。自分をたいせつに。

(3) 人間はすべて兄弟・肉親。

知ろうとつとめあおう。

(4) 日々をたいせつに。(充実)

はつとすること。見つめること。抽象すること。自分にひきくらべて考えること。

(3) 実践経過およびメモの比較

(4) 実践経過の比較

昨年度の實踐は、構想、叙述の研究を通して、主題たる「死」によっても減ほしえない生命の意志」を感じとらせようとして

いる。これは、たとえば「文学の研究」という単元に組まれて  
いる作品に対してもとられるはずの方法である。

本年度の実践は、主題よりむしろ、作者がどういうところ  
で、なにに感動しているか。自分は果してどうか。どうしてち  
がうのか。どうしたらよいのか、という読み手の自己反省が中  
心になっている。換言すれば、「作者が何を見たか」よりも、  
「どうすれば作者のように見ることが出来るか」が中心となっ  
ている。いわば、教養主義的な読み方と、実用主義的な読み方  
ともいえるであろうか。

昨年度の終結を鑑賞文によったのも、読み手個々の自由な取  
纏を許そうとしたためであり、本年度の終結をかえ書き(メモ  
②参照)にしたのは物を見る立場、物の見方を確かめさせたか  
つたためである。

#### (四) メモの比較

メモを比較したばあい、二つの大きな相違がある。

##### (a) 単元を意識している度合い。

昨年度の二枚のメモには、単元を意識している点が見られ  
ない。それに対して本年度のメモは、この教材が「人生の探  
求」という単元の終結部であることをはっきりと意識してい  
る。

##### (b) 内容

昨年度のメモは「主題」「構成」「叙述」「作者」と、い  
わゆる文学研究のポイントが羅列されているのに対して、本  
年度のメモには「主題」も「叙述」もない。そして「構想」  
といっても作者の心理の変化とその契機だけである。

いわば昨年度のメモは教材研究的抽象的であり、本年度の  
は指導案的、具体的であるといえるかもしれない。

(ただしどちらが正当な指導案であるかは別の問題である。)

#### 四、問題と反省

以上、二回の実践を比較してみると、批判の対象として二つの  
ものがあげられる。一つは教科書および指導書であり、一つは指導  
者である。

##### (1) 教科書および指導書の問題点

###### (イ) 単元設定のしかた

まず問題として考えられるのは「人生の探求」という単元が  
はたして設定されるものかどうかということである。もちろ  
ん設定されなくてはならないであろう。また高等学校のある時期に、  
集中的に、意識的にそれに取り組ませることも無意義とは思わ  
ない。しかしいったい「人生の探求」とはなんであろうか。ま  
た「人生」とはなんであろうか。風土、風俗を異にする数十億  
の人がおり、人それぞれに人生を歩んでいる。それを意識に入  
れての単元設定なのだろうか。むしろ「人生の探求」は教科  
書全部(国語に限らず)の大きな単元ではなからうか。手  
もとにある十種ばかりの教科書の単元を通覧してみたが、「人  
生」の文字を使用しているのはわずかに二種であった。これが  
正しいのではなからうか。

##### (ロ) 教材の配列

「人生」の内容は極めて茫漠としている。だからその探求も  
多角的になるといふ意識からであろうか。この単元に含まれて

いる教材は実に多彩である。(指導目標と単元構成参照)

しかし、数種のジャンルを読みこなす力を持つことがそのま  
ま人生の探求であるとは思えない。数種の人の生き方を探ると  
いうにしては不十分である。結局「物の見方」を考えるという  
ことで一貫されると思うが、それにしてもっと素材の集め方  
があると思われる。教科書編集者にそこまでの配慮があつたか  
どうかの問題であるが、いささか多岐亡羊の感を禁じえない。

#### 例 指導書の「目標」

この単元に含まれている教材が、極めて茫漠としてい  
る前に述べたが、それを反映しているのが「単元の目標」(二  
「指導目標と単元構成」参照)である。

抜き書きした三項をくらべてみると、(1)(2)は「人生の問題を  
きわめる態度を正しく指導する」ということになると思うが、  
それをまとめた(3)では「手がかりとする」という表現が使われ  
ている。同じことだと言えなくもないだろうが輩頭野屋の感じ  
がするし、また、読み方によっては「詩・箴言・評論、小説に  
読みなれる」ことが「人生の問題をきわめる態度を指導する」  
ことになるともとられる。もしこれらのジャンルに読みなれさせ  
ることが目標ならば、ここにだけ「人生の探求」の題目を冠  
することは不適當である。

またもし「人生の問題をきわめる態度を養う」ことに中心が  
あるとすれば「読みなれ」という表現は不適當である。明確に  
「こういふ目標を追求する時の読み方を考えさせる」とすべき  
であらう。

またもし「こういふ目標を追求する時の読み方」が問題にな

るのだとすれば、これらの教材を扱うばあいは、次の二つの方法  
がある。(「赤がえる」を扱うばあいに限定して)

一つは作品研究のないっさいの手続きを省略して、すぐに討  
論なりレポートなりにはいらせる方法である。

いま一つは「教訓的、実用的なテーマを設定する」という方法  
である。私の本年度の指導はこれに類しているが、別の例をひ  
いて説明してみると、たとえば芥川龍之介の「くもの糸」を指  
導するとして、「エゴイズムは結局その本人を不幸にするもの  
だ。近視眼的な立場は危険だから、われわれはもっと広い愛に  
立つべきである」と指導するか、または「すべて人間はエゴイ  
ズムによって亡びていく。しかも人間はどたんばに立たされた  
とき、エゴイズムに陥らざるを得ない。つまり人間は究極的に  
は救われない」という芥川の蒼白な人間否定にまで行きつかせ  
るかということである。

どちらも「人生の探求」にまちがいがいとすれば、どちら  
を目標にしてもいいのであろうか。

単元の設定、教材配列、指導目標、すべて茫漠としている。  
教科書編集者にいま一度の検討を希望する前に、われわれはも  
っときびしく教材を見つめなくてはいけないと思う。

#### (2) 指導者の反省点

##### (1) 教材研究の不足

前項で述べた教科書および指導書の問題点は、逆にいえば指  
導者の研究の不足を示すものである。昨年これだけ考え進んで  
いたならば、もっと指導は変わっていたはずである。一つの教

材を單元の中に位置づけ、さらに高等学校全体の中で位置づけ、さらに生徒の生涯の中で可能なかぎり位置づけようとする努力は払われなくてはならないであらう。

#### (四)方法偏重主義

大宅壯一氏のなにかの文章に「現代ではミケランジェロやデューテのように、なんでも知っているということは不可能になった。いや一つの範圍においてさえきわめることは困難である。だから現代人のなすべきことは、どれだけ知っているかではなく、どうすればそれを知ることができるかを知ることである」という意味のことがあり、感銘をうけた。それが本年度の「赤がえる」の指導の基礎になっている。「健作が何を見たか」ではなく「どうしたら見られるか」が中心なのである。大宅氏の所説そのものには異論はないが、文学教材の指導への利用のしかたは大いに問題がある。「どうすれば文学教材を自分の資にできるか」という立場をとることのほうが望ましいと思う。

#### (五)目標設定の方法

昨年度、また本年度の目標の設定はすべて指導者である私のひとり相撲である。ことにこの單元のように目標に不安があるばあい、生徒の自主性を反映させるといふ方法が完全に忘れられている。生徒各自の持っているものを伸ばしていくという基本を、もう一度確認すべきである。

#### (六)指導の方法

目標に不安があるばあい、クラスによって目標、方法を変えてみるべきであった。單元、グループ法は、本来そのような変化を止揚することが目標なのではなかったであらうか。

指導方法の反省として、いま一つ言えることは、本年度の指導では後半、ほとんど生徒を教材からはなしてしまったことである。最後まで教材に即して考えさせることが望ましいと思われる。そしてそれができるためには、教材が指導者の薬籠中のものになっていなくてはならない。

以上の四項目が「赤がえる」の指導を反省して得られた私の将来の課題であるが、これをまとめると

#### 1、目標の確立

#### 2、教材研究の徹底

ということになる。

これはずでに教育実習で教えられたことではなかったか。

(祇園高校教諭)